

言語行為から読む「にぎりえ」試論

― お力の苦悩と愛における心的二重性をめぐって

笹 川 洋 子

一 はじめに

一葉は日記に妹くにと盆燈籠を見たことを記しているが、^(注1)奇しくも、この物語を読むと、読者は盂蘭盆会に祀られる幻想的な廻り燈籠を見ているような感覚に包まれる。物語を追っていくと、ぼんやりとさまざまなものや言葉が浮かび上がり、消えてゆき、また別の場面がためらいがちに開く。そしてそれもやがて物語の背景、ほの暗い濁江に吸い込まれるように消えていく。作者は物語の真実をはっきりとは語らず、物語の印象だけが読者の手に残される。文脈の読み取りを読者の手にゆだねるという表現技法は、樋口一葉がさまざまな物語で試みた手法だが、特にこの「にぎりえ」では、多様な解釈可能性が物語空間のそこに残されている。高田知波（一九九七）は、このような書き手としての一葉の姿勢を評し「△言葉▽による語りを中絶した後のお力について、一義的、明示的な説明を徹底的に拒もうとする語り手の強い意志が浮かび上がってくる（高田, *ibid.*: p.128）」と表現しているが、この一葉の書き手としての姿勢は、この物語り全体を貫くものでもあろう。本稿では、物語の中の言語行為を鍵にお力の心的世界に近づき、こうした「にぎりえ」の物語における解釈の多義性をめぐる問題のうち、お力の苦悩と愛について、心的二重性という視点から探っていききたい。

二 お力の苦悩における心的二重性

二・一 お力の苦悩を引き起こすもの

場面五では、盆の夜お力が菊の井の宴席を放り出し、夜の闇に駆け出して行く。

お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝ唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だくゝと道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、

(五)

この場面におけるお力の語りから、お力の異常な心理を精神病理から分析する説がある。前田愛（一九八九）は、お力の感覚を離人症の兆候と解釈し、田中優子（二〇〇四）は、これは精神が追い詰められた時に生じる一種の対処反応であり、自分が自分であることを放棄してしまう解離症状だと述べる。お力自身は自分自身の心理状態について、氣違い、氣が狂ったという表現で語る。「祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つまりは私のやうな氣違ひで（六六）」「話しは誠の百分の一、私はその頃から氣が狂つたのでござんす（六七）」「氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります（六八）」。また、木村真佐幸（一九六八）はお力は何人にも語りえない、烈しい苦悩に生きており、「その結果、心身共に疲労困憊の極に達し、その解決の場、換言すれば、いきつく果ては『死』以外にはなかったのではなからうか。（木村, *ibid.*, P.207）」と記している。

このように、お力が心の中で葛藤し、苦悩し、それが原因でこのような心理状態に追い詰められていったのは明

らかであるが、その状態は「葛藤や苦悩」と一言で片付けるにはあまりに複雑である。^(注2) 言い換えれば、一葉はお力をより複雑な自我を持つ人物として描き出しているのである。そこで、ここではお力の言語行為を整理し、彼女を追いつめた心理状態をより詳細に分析してみたい。

お力の狂おしいまでの葛藤はなぜ起こったのだろうか。まず、自我の整合性という視点から考えてみよう。私たちは自己の中に相矛盾するものを存在させ、その曖昧さに対峙し、なだめすかせながら日々を過ごしている。そして、真摯に自己の整合性を突き詰めていこうとする姿勢は、逆に自己分裂に陥る危険性をはらむと言われる。斎藤久美子（一九九〇）によると、自我の要素的機能の一つとして、「総合—統合機能（synthetic-integrative functioning）」があげられる。これは矛盾する態度、価値、行動、自己表象などを調和させたり、統合する機能であり、「いろいろなことをバラバラ、あいまい、あるいは矛盾として経験するだけでそれへの耐性がないと、自己感情やアイデンティティの諸側面が互いに解離したままになり、多重人格を極点とするような人格上の大きな問題が生じ、一貫性のある人生目標が持てない。（斎藤 *ibid.*, p.131）」。物語の中で語られる、お力の苦悩はこうした自我の不調和、不統合に起因していると考えることができよう。さらに、自己矛盾への耐性がないと自己分裂を起こす恐れがあることはグレゴリー・ベイトソン（G. Bateson）の「ダブルバインド」の視点からも説明できる。ベイトソンは分裂症の誘引について、第三者から発せられるメッセージが矛盾する場合、それを受け止める者（特に子ども）は自己分裂を起こすと考えた。これはお力が苦悩する内面の不調和を説明する際にもあてはまる。お力の内では、分裂症の子どもと同じように、自己を引き裂く声が響き、引き裂く力として働いていたのではないだろうか。一葉が、お力を通して描いたような、人間の苦しみ、自我のありように注目した作家がドストエフスキーである。金澤美知子（一九九四）はドストエフスキーの本質について次のように述べている。

ドストエフスキーは人間の心理を描くことにかけては、実に非凡な才能を示した作家である。彼は人間の心の動きを観察し、ある理論に基づいて分析してみせた。それは、正反対のものへ同時に向かう、という「二重性」の論理であった。彼は愛情の中に憎悪を、感謝の中に憎しみを、神の否定の中に信仰への願望を認め、この矛盾した状態をそのまま受け入れたのである。ドストエフスキーは合理主義的な考え方を嫌い、矛盾や自己分裂にこそ人間本来の姿を見ていた。彼の作品の中では、矛盾に対する明確な解答やカタルシス（＝苦悩などの浄化・解消）は与えられない。カタルシスが予感として暗示されている場合でも、彼の作品の面白さは、主人公たちがこの矛盾の中でどのように自己のアイデンティティ（＝自己同一性）を保ち続けるか、という点にある。

（金澤美知子, *ibid.*）

一葉がドストエフスキーの「罪と罰」の翻訳を繰り返し読み、その影響を受けたであろうことは、平岡敏夫（二〇〇四）に詳しい。平岡（*ibid.*）は、塩田良平（一九五六）が『罪と罰』が一葉の作品に与えた影響について、一葉の作品自体は形式的な影響はうけておらず、『罪と罰』は一葉の作家精神に支持を与えたという程度と論じているのに対し、作品の登場人物や物語構成、あえて対極をめざした表現技法に『罪と罰』の影響を見てとる。しかし、平岡（*ibid.*）の指摘する物語の人物や物語構成の方法に加え、「にぎりえ」の物語の主人公お力もドストエフスキーの人物描写の方法も「矛盾する自我の葛藤」にあったことを思い合わせると、一葉はお力の心理描写にあたってドストエフスキーの技法を参考にしたのではないだろうか。つまり、お力はソーニャや老婆と重なりあうだけではなく、自分の罪に悩む主人公のラスコーリニコフ自身の想いが投影されていると考えられる。いわば、「にぎりえ」はお力自身の「罪と罰」を描いた作品なのである。

次節では、物語で語られる、お力の中にある相対する想いを探っていくことにしよう。

二・二 お力の心的二重性

お力の心に秘めた悩みがもっとも具体的に語られるのは、場面六である。この場面でお力は、これまではぐらかしていた結城の求めに応じて自分の身の上を語る。お力は物語った後、涙がとまらず、声を押し殺すために、紅の手巾をかみしめる。音のない時間はお力が号泣していた時間と重なる。読者は、お力の心の奥底に秘められていた悲しみの深さに触れることになり、一葉がお力の真実をこの表現にこめたことを知る。^(注3)

いひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅ひの手巾かほに押當てその端を喰ひしめつゝ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり聲のみ高く聞えぬ。(一六)

今は大人になったお力の胸に、今もなおこれほどまでに悲痛な思いを引き起こす七歳の頃の原体験は、幼いお力に心理的に大きな打撃を与え、その影響が長く残るような体験、すなわちお力のトラウマ(精神的外傷体験)となっていると考えられる。その頃、お力は飾り職人の父と母と親子三人で暮らしている。しかし、真冬に古浴衣で寒さに震える赤貧の生活である。お力は米を買いにやらされる。帰りは、手も足も寒さで冷えきり、感覚がなくなっているところに、氷で足をとられ、握っていた味噌こしを取り落とし、中の米がざらざらと溝板の隙間からこぼれてしまう。

寒中親子三人ながら古浴衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私に去る物を買に行けといふ、味噌こし下げて端たのお錢を手握つて米屋の門までは嬉しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしてみても足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の水にすべり、足溜りな

く轉ける機會に手の物を取落として、一枚はづれし溝板のひまよりざら／＼と翻れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど是れをば何として拾はれませう、其時私は七つであつたれど家の内の様子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こし下げて家には歸られず、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買てやらう言ふ人は猶更なし、あの時近處に川なり池なりあらうならば私は定し身を投げて仕舞ましたろ、話しは誠の百分の一、私はその頃から氣が狂つたのでござんす、販りの遲きを母の親案じて尋ねに來てくれたをば時機に家へは戻つたれど、母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る物もなく、家の内森として折々溜息の聲のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日斷食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。(一六)

ここでお力が語るのは、貧困の悲しみ、幼い自分が家族の想いを裏切り、自分の過失で家族に身を切るような辛さを与えた悲しみである。「話しは誠の百分の一、私はその頃から氣が狂つたのでござんす(一六)」という言葉から、その後、お力が自分の思いとは逆に、この幼い頃のエピソード以上の酷い不幸に遭い、人を不幸に陥れ、そのたびに自分自身の身と心を切り刻み悲痛な思いを重ねてきたことが伺える。お力は酌婦という商売柄、源七をはじめ、多くの男、そして家族達を不幸な境遇に陥れてきたと推測されるが、そうしたお力の悲しみは次のような文で語られる。

菊の井のお力とても惡魔の生れ替りにはあるまじ、さる子細あればこそ此處の流れに落こんで嘘のありたけ串戲にその日を送つて情は吉野紙の薄物に、螢の光ぴつかりとする斗、人の涕は百年も我まんして、我ゆる死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他處目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゝ

まつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涕、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに根性のしつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蜘蛛の糸のはかない處を知る人はなかりき（五）

お力は、人の悲しみに対する繊細な感受性を持っているが、商売のためには、そうした思いを押し殺し、自分の思いとは正反対の冷酷な人間として振舞わなければならない。言い換えれば、お力の生活は、彼女が精神的に安定しえるであろう、情に篤く生きるという環境からまさに対極にあり、そこにお力の深い苦悩がある。自分の罪の重さを日々感じているお力の眼差しは、たびたび源七の幼い一人息子太吉に向けられる。お力は、おそらくは穏やかに豊かに暮らしていたであろう源七一家に、貧困の惨さ、悲しさを味あわせた張本人である。七歳の頃の深い精神的外傷体験を今も背負っているお力にとって、それは耐え難いものであったに違いない。一葉は、太吉に対するお力の想いに、恋する人の子どものということに加え、お力が幼い自分自身を太吉の姿に投影する哀切な思いをもこめたように感じられる。母親のお初の問いに答えて、太吉ははからずしも「鬼姉さん」という言葉を口にするが、高田知波が指摘するように、太吉は母親から教えられたであろう「鬼」という言葉の重さを理解しておらず（高田知波、一九九八、参照）、姉さんという親しさをこめた表現と共存させてしまう。この言葉から、お力が太吉に暖かい眼差しを向けており、太吉もそれを感じ取ったことが伺える。しかし、お力の心には太吉の「鬼」と罵る言葉だけが響く。場面三で町を見下ろしていたお力は、結城の手をとり、幼い太吉の姿を見せる。

あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ計の、彼子が先刻の人でござんす、あの小さな子心にもよくよく憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な悪者に見えまするかとて、空を

見あげてホッと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。(三)

「鬼」という言葉がお力を深く傷つけていることがわかる。しかし、この場面の直前の結城との会話では、会いに来た源七に対して、それほど辛い「鬼」と罵られようと、彼のためには会わない方が良いという言葉が伝えられる。ここで描かれる、お力の人に対する思いは決して冷酷なものではない。

何も今さら突出すといふ譯ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござります(三)

さらに、冒頭には次のような語りが入れられる。人々は、お力を冷酷な人間というより、やさしく、どこかに高い志を秘めた女性として噂する。

お力といふは此家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際ては存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴へて見へるは彼の子の本性が現はれるのであらう(一)

お力が自分の本心を語る場面は多くないが、場面五では、読者は街に走り出たお力の内面に入っていくことができる。この語りから、お力をさいなむ情けなさ、悲しさが、人を悲しみに陥れる業の深さ、すなわち「人情知らず、

義理知らず」の生き方をしているところにあることがわかる。

情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞う、ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人情しらず義理しらずか其事も思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ、此様な身で此様な業體で、此様な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである、(五)

お力の葛藤が、自我を統合できない、すなわち引き裂かれていく自我の二重性という問題にあり、それが義理知らず、人情知らずという生き方に起因するとすれば、「丸木橋を渡る」という表現にこめられた意味をこれまで論じられている諸説とは別の視点から考えることができる。

二・三 お力にとっての丸木橋を渡ることの意味

「丸木橋を渡る」という表現に一葉はどのような意味をこめたのだろうか。結論から言うと、本稿では、心的二重性に苦しむお力が「丸木橋を渡る」ことでめざしたものは「自我の調和した一個人として生きる道」ではないかと考える。これは木村（一九六八）が既に触れている「純粹な人間性の希求」という考え方に近いが、木村はお力が具体的にどのような「純粹な人間性」に向かつていこうとしたかについては論じていない。ここでは、お力が希求した生き方とは人に悲しみを与えない「義理も人情も知る」生き方という点について確認したいと思う。

まず、ここでは「丸木橋を渡る」という場面のお力の語り、すなわち言語行為の観察を通して、お力にとって

「丸木橋を渡る」とはどのような意味を持っていたかを考え、先行研究における諸説を検討し、本稿の立場を明らかにしていくことにする。

お力の短い語りの部分を追っていくと、お力の気持ちは一枚岩ではなく、微妙に揺れており、何層かに重なっていることがわかる。滝藤満義（一九九八）はお力の心の変化について次のように記している。

この時真先に彼女を襲ったのは、「物思ひのない処」へ行きたいという、いわば涅槃願望とも言うべき暗い想念である。しかしすぐに父祖の怨念が彼女を死から引き戻し、「丸木橋」を渡れと命ずるのである。「丸木橋」は言うまでもなく、世に出るための危険な、しかも避けることのできない通り道である。「何うで幾代もの恨みを背負て出た私」だからと、お力は「為る丈の事はしなければ」と覚悟し直すのだが、しかしここに来てハタと彼女は行きづまってしまう。それは何を以て世に出たらいのかわかっていないからである。祖父にとっての漢学、父にとっての飾職に相当するものが彼女には見当たらない。結局、「ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう」というところへ戻ってしまわざるを得ないのである。「人並みでは無い」「此様な業體で」「人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである」と言い慰めながらである。

（滝藤満義、ibid.、p.204）

すなわち、「死への暗い願望」↓「丸木橋を渡る覚悟」↓「思い直し」↓「考えることの放棄と慰め」というような思いが、お力の心の中で大きく揺れ、変化していくのである。ここでは、死への願望を語る箇所以降の語りに注目し、「丸木橋を渡る決意」↓「思い直し」↓「考えることの放棄と慰め」という順で、お力の心の微妙な変化を追ってみよう。「丸木橋を渡る決意」は次のように語られる。

渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし聲をそのまゝ何處ともなく響いて来るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう。(五)

お力の祖父は「漢文学者」、父は「細工職人」として、自分の理念を通した生き方をした。しかし、お力の語るように祖父や父は、その努力が報われずに失意のうちに亡くなっている。ここで、お力の考えている丸木橋を渡るということは、自分の理想・意思をいかす生き方ではないだろうか。そして、どうせ幾代も続いたように、失意のうちに終わる人生を生きる運命であるのだから、自分の思うだけのことはしないと死んでも死ねないのだろうと、前節で触れたように、お力が希求する、「世間を知り、義理を知る」人情に篤く、義理にも答えられる生き方を考えようかとも思う。

しかし、続く語りで、お力は「思い直し」、現在の自分の境遇を見つめる。

情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞う。(五)

ただ、情けないと言ってみても、誰も哀れとは思ってくれないだろうし、悲しいと言えば、商売が嫌なのだろうと一言で片付けられてしまう。どんな形にせよ祖父や父は理念を通して生きられる環境があったが、お力にはそうした自分の理念を通すことのできる環境さえ与えられていない。そして、すぐに「思い悩むことの放棄」をする。

ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう。人情しらず義理しらずか其事も思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ、此様な身で此様な業體で、此様な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである。(五)

お力は思い悩むことをやめようと決心する。えい、どうしても勝手になれ、勝手になれ、これ以上考えても、私の身の処し方は分からないから、分からないまま菊の井のお力を通していこう。人情知らずとか義理知らずとか、そんなことも思うまい。思ってみても何もならない。どうせこんななりわいで、どうしたからといって人並みではないのだから、人並みの事を考えて苦勞するのがそもそも間違ひなのだ、と。しかし、この思い悩むことの放棄は、積極的な姿勢ではなく、自暴自虐という表現に近い放棄の仕方である。

丸木橋をめぐる諸説を、愛知峰子(一九九六)、菅聡子(二〇〇一)等は、現状からの変化(変化説)を願う「死の世界」(前田愛、一九八九他)、「社会変革の大望」、「功利的な出世」という解釈、そして現状を維持(不変説)していかうとする「現在の生き方の肯定」に大別している(愛知 ibid、菅 ibid 他参照)。

しかし、先に示したようなお力の心の変化を追っていくと、「丸木橋を渡らざるまい」と決意した丸木橋を渡った向こう岸にあるお力の願ったものは、これまで解釈されているような「死」、そして「自己分裂を起こしている現在の生き方の肯定」ではない。「丸木橋」を渡った対岸にあるものは、お力が希求する状態であると思われるが、お力が「丸木橋」という表現の箇所、死や現在の生き方を望んでいないのは明らかである。また、「社会変革の大望」については、一葉自身が「にぎりえ」に社会の不条理を訴える思いをこめたと解釈することは可能であり、お力も社会の不条理に対して悲痛な嘆きを表現する。しかし、お力自身の語りには社会変革の大望はみられ

ない。また、「功利的な出世」にしても、結城がお力の出世願望について言及する箇所はあるが、お力は直接出世を願う思いを語らない。^(注4) また、この場面五では結城はいまだに「左のみに心も留まらざりし(七)」客の一人であり、お力が結城と一緒にすることを丸木橋の対岸に見ている可能性は少ないであろう。

さらに、愛知はお力が現状を維持しようとする不変説をとるとしているが、その態度には現状に立ち向かおうとする積極性があることから、「対峙説」という言い方をあてている。^(注5) 私の考える「人情も義理も大切にできる、自分の思いを大切にできる道を生きる」という解釈もこの「対峙説」に近い。しかし、人情や義理に対する負い目を感じ続けていく現状の行き方は、お力の望む生き方ではない。お力の考えているのは、具体的な生活としての生き方にあるのではなく、理念的なレベルの、人情や義理の欠落に苦しまない、人を悲しい境遇に陥れない、人情に篤く、義理を知るといような志の高い精神性を保つ生き方にあるのではないだろうか。また、愛知の指摘するような「現状の生き方を肯定する」お力の思いは、幾度かお力の思いが揺れ、変化し、そして最後に思い悩むこと自体を放棄する文脈で立ち現れる。「丸木橋を渡る」という語りの部分は、思い悩むことを放棄する内容とは別に考えられなければならないまい。

では、このように一瞬ではあるが、祖父や父のように、世に受け入れられずとも、志を貫く生き方をしようと思っただお力が、結城と一夜を共にし、そして数日後に源七と死を迎えたのはなぜだろうか。本稿では、お力の苦悩の根底にあった、正反対のものへ同時に向かう心的二重性が、お力の愛にも起こったと考える。すなわち、お力は源七に魅かれながらも、同時にはじめは無関心であった、結城に魅かれていったが、その結果、心には自己を引き裂く力が強く加わり、死への道を選ぶことになったのではないか、本稿ではこのような仮説にたち、お力の愛の行方について論じていきたい。続く三章と四章では、源七と結城という二人の男性に対して向かう、お力の愛情についてはじめにお力の源七に対する想い、次にお力の結城に対する想いをとりあげ、考えていくことにしよう。

三 お力の源七への想い―お力の愛における心的二重性

本稿では、お力の苦悩は、正反対の思いが同時に起こることによって、お力の心に強い自我の解離や矛盾が起こり、それがお力の内面に深い悩みとして鬱積していたことを論じてきた。お力が源七を愛したのか、結城に魅かれるようになったのかは、さまざまに論議されているが、ここでは、お力の愛の状態についても、心的二重性の問題が起こったという視点から分析を行いたい。すなわち、お力の中で源七と結城を思う気持ちが重なって起こり、その矛盾に人一倍、純粋なお力の心がさらに強く引き裂かれていったのではないだろうか。この状況を考えるには、まずお力の源七への想い、そして同じように結城への想いを探っていく必要がある。しかし、「にこりえ」では源七の燃えるようなお力への想いは語られるが、お力の源七を想う語りは見事に欠落している。同じようにお力の結城への思いも、商売用の嘘言と真実が入り混じり、曖昧として捕らどころがない。ただし、その鍵となる語りや言語行為は物語の随所に散りばめられている。ここでは、そうした言語行為を拾い集める作業を通し、語られないお力の心理へ近づく試みをしていきたいと思う。

三・一 場面一―お高の勧めとお力の応答（菊の井の店先）

物語は菊の井の店先で客を呼び止めるお高の台詞から始まる。お高の年は「二十の上を七つか十か」、「二十八か九」の源七の女房お初とほぼ同じ年である。客を逃がしたお高は「女房持ちに成つては仕方がないね」とお高は独り言を言いながら、お力のいる店の中に入る。お力は、立膝について煙管を吸う、大嶋田にさりげなく飾った「新わら」のようなさわやかさを持つ若く美しい女性として描かれる。お力のあだっぽい美しさは、「唇は人喰ふ犬の如く」というお高とは対照的である。お高は髪型も大嶋田と品のないとされた天神がえしで（菅、二〇〇一、参照）、しかも、簪で頭をかくという品のない行為をしている。お力が「えりもとばかりの白粉も栄えなく見ゆる天然の色

白」なのに、お高は「白粉べつたりとつけて唇は人喰う犬の如く……」と記される。

やがて、お高の話は女房持ちで、身を落としてもなお、お力に思いを寄せ続ける源七のことになる。

お高は往來の人なきを見て、力ちゃんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、夫は今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があるがさ、ねへ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別れられる物かね、構ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞといったら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは其れとは違ふ、(一)

了簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一處にならうとは思ふまい、夫だもの猶の事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるが宜い、何の人お嬢様ではあるまいし御遠慮計申てなる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわな(一)

お高は冒頭で、自分から遠ざかった男を指し、「女房持ちに成つては仕方がないね」という台詞を言うが、これは落ちぶれてもお力を思い続ける源七の誠実さを際立たせる。お高はお力と源七が思い合ったという表現を用い、源七の妻お初に遠慮をせずに、手紙をやって源七を呼び、会うといいと進める。もちろんお高がいいお客ではないけれど、と言っているように、源七に対する菊の井の扱いはあくまでも客の一人なのである。お高はお力にいちばん近い登場人物であり、お力の気持ちをいちばんよく感じとれる位置にいる。お高の判断の信憑性を疑う説もある

が、お高はお力が人情と義理の板ばさみになり苦しんでいることを見抜き、お嬢様のような「遠慮」という言葉で表現する。

（お高が）・・・と言ひながらお力を見れば烟管掃除に餘念のなきか俯向たるまゝ物いはず。やがて雁首を綺麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫に持つなど、考違へをされてもならない、夫は昔しの夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞て源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止めくといひながら立あがる（一）

うつむいて物も言わず煙管掃除をしていたお力は、通りを良くするように自分で一、二服吸い、お高に手渡す。そして、人聞きが悪いし、土方の間夫を持ったといわれてはたまらない、もうその話はやめてほしいと言い、お高の言葉を遮るように立ち上がり、冒頭のお高と同じく客を呼び止めるという行為を行う。お力の言葉は、お高の考えているような源七への思いはもうないことを伝えている。しかし、お力はじっとお高の言葉に耳を傾け、丹念に掃除をした煙管を、お高のために手渡す。無言でうつむいているお力の姿には、語られるお高の言葉を静かに受け取る氣配が感じられる。そして、お力の言葉はお高を拒否しているが、丁寧に手入れした煙管を渡す行為はお高の助言を拒むというよりむしろ愛情と感謝に満ちたものであると言えるだろう。

なお、この場面では、「女房持ちの男」という話題と、客を呼び止めるという行為、そして「手紙」の話題が繰り返される。物語の始めの部分で、お力は「（注6）彼の人」から届いた長い巻紙の手紙に返事を書かず、彼の人の手紙に対して「あれもお愛想さ」と言い放ち、お高に「お愛想でできるものかな」と言われる。お高は源七のことに触れる時は、往來に人のいない時を見計らうが、彼の人の手紙の話題はそうした氣遣いになしに話される。つまり営業

にふさわしい公けにして良い話題なのである。そして、お高の公けな「彼の人」と私的な「源七」の区別から、私たちは源七がお力の内で間夫に近い客という存在であろうことを伺い知ることができる（高田知波、一九九八、参照）。

三・二 場面三―不思議そうな顔をする女とお力の視線（月夜の菊の井の二階）

さらに場面三では、お力は客となった結城と菊の井の二階にいる。お力は結城に「三日見えねば文をやるほどの様子」を仲間にかかわれるが、お力は結城に魅かれていったのだろうか。もし、そうならばお力は結城に視線を見つめるはずである。しかし、場面七でお力はやっと「常には左のみに心も留まらざりし結城の風采」を初めて眺める。それまでは、お力は結城を前にしても、彼を見ていないのである。ここでは、この場面における店の女の言語行為とお力の視線から、お力の源七への思いを探ってみよう。

結城は「お力、酒だけはひかえろ」と意見するが、お力は自分は酒の力で店に出ていられるとやり返す。その時、源七が来たと店の女が伝えに来る。

折から下坐敷より杯盤を運びし女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行き度ないからよしてお呉れ、今夜はお客様が大變に酔ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出来ませぬと斷つておくれ、あゝ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかへ、はあ宜いのかとて膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆく（三）

お力は今夜はお客様が酔ったから会えないと斷るように女に言う。女は「お前はそれでも宜いのかえ」と不思議そ

うに立っていく。この短いやりとりからは、この夜の断るという行為がいつもとは違う特別のものであったこと、いつもはお力が喜んで源七に会いに行くであろう様子が推測できる。もし、いつも断るのであれば女は不思議そうな顔をしないであろう。まして「お前はそれでも宜いのかえ」という言葉を残している。お力が源七のことを想っていることは、朋輩のお高だけにではなく、「女」と語られるような菊の井の奉公人も周知の事実なのである。お力はこの事情を「女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに来る歳ではなけれど、縁があるか未だに折ふし何の彼のといつて、今も下坐敷へ來たのでござんせう、何も今さら突出すといふ譯ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござります」と結城に説明しているが、周囲の人の言葉は、源七は何度かお力に会いに来ており、お力も心から喜んで源七と会っていることを浮き彫りにしている。お力は女の会わなくてもいいのかという問いに、はあよいのさと返事をした後で、膝の上で撥を弄ぶが、この行為にはお力の惑い乱れる気持ちが象徴されているように思える。そして、言い訳をしながら、お力は前にいる結城を見ず、延びあがって町を見下ろすという行為をする。

撥を疊に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと翻る、あゝ最う歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのは夫れかと切込まれて、まあ其様な處でござんせう、お醫者様でも草津の湯でもと薄淋しく笑つて居るに、(二)

この時、結城はお力の前にいるが、お力の目は彼をとらえていないことは、先に述べた通りである。人が何かを見つめる時、延びあがって見るという姿勢になるのは、その人の視線が懸命に何かを追っている時であろう。そして、良い客である結城が前にいる状況では、お力は言葉と同じように、源七への思いを抑えようとしたはずである。

しかし、お力の身体はお力の抑制に逆らうように、お力の思いを正直に表現してしまったのであろう。一葉はお力の抑制を「少し延びあがり」と「少し」という言葉で表現しているが、強く抑えてもなお、お力の心の中に湧き上がる源七への思いの深さを読者は感じ取ることができる。そして、お力が懸命に追った源七の姿は見えなかったのであろう。お力はしばらく茫然としている。お力が言うように、今はさほど源七に関心がないのなら、その姿をとらえられないだけで茫然とするだろうか。一葉は一文にも満たない短い表現で、お力の源七への抑えられない思いと恋するものの落胆を描き出したのである。

そして、結城に冷やかされ、お力は淋しい笑いを浮かべる。お力は結城の源七はどんな男だというに問いに答えて、「見たら吃驚でござりませう色の黒い背の高い不動さまの名代」、「此様な店で身上はたくほどの人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人」と源七を表現する。^(注7)「大日如来」の使者と

される不動明王は、悪魔を降伏するために大変恐ろしい姿をし、すべての障害を打ち砕き、おとなしく仏道に従わないものを無理矢理にでも導き救済するという役目を持っている。そして、大変恐ろしい姿とは反対に、心は人々を救済しようとするやさしい慈悲に満ちていると言われる。お力、つまり一葉は、今は落ちぶれて貧相な姿の源七だが、その心には誠実なやさしさが溢れていることを、この一言で表現したのであろう。そして、鈴木啓子（一九九八）が言及しているように、この比喩は、物語の結末で二人が死を迎えた時、源七が不動明王の死者として、お力の罪を贖罪し、お力の魂を救済するという読みに結びつき、新たな重さを持って立ち上がってくる。

源七の姿をのびあがって追ったお力だが、今度は窓辺から町を見下ろし、結城の手をとって、彼に源七の子、太吉の姿を見せる。場面三までは、源七がお力の心の中で大きな存在を占めていたことが伺える。しかし、この場面で以降、お力の源七への思いを語る表現は皆無となる。そして、場面八で再び登場するお力と源七は、二人とも棺の中で冷たく横たわる死体となっている。お力が自分の心に秘めた悲しみを語る、場面五、六で源七に代わって、お

力の視界に入ってくるのは結城朝之助の姿である。

四 結城への想い―お力の愛をめぐる心的二重性

前章では、場面三までは源七がお力を思うように、お力も源七を慕っていたという読み取りを試みてきた。それでは、短い夏のはじめに突然現れた客、結城朝之助に対し、お力はどのように思いを変化させていったのだろうか。源七がお力を一途に思っているのに対し、結城はお力とは違う世界の人間として現われ、お力に関わってくる。そして、結城に対するお力の思いも刻々と変化していく。

四・一 結城への無関心

(一) 場面二―問い続ける結城朝之助(雨の日の菊の井の二階の六畳間)

場面二では、ある雨の日にお力に強引に呼び止められた結城が菊の井の座敷に上がり、お力に次々と問いかける。これに対して、お力はこれを拒む。「年を問はれて、名を問はれて、其次は親もとの調べ、士族かと。といへば、夫れは言はれませぬ。といふ。(二)」等と二人の会話では、次から次へと発せられる結城の問いと、それをやりすごすようなお力の軽妙な答えというやりとりが続く。そして、この流れを断ち切るように、お力は「もう此様な話しは廢しにして、陽気にお遊びなさりまし。私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひます」と言い、手をたたいてお高を呼ぶ。この結城の問いを遮る発話からは、延々と続く結城の詰問を、毅然として止めるというお力の意図が読み取れる。

続く場面で、お力は結城の紙入れからお札を出し、勝手に撒き散らす。結城はお力の無礼な行為をとがめない。お高は撒き散らされたお札を「掻きさらつて」いくが、お力はお札に関心を示さない。また、この時、お力は結城に「お相方の高尾にこれをば預けなさいまし」、「嘘か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ」という言葉を投げかけ、

暗に高尾太夫と伊達綱宗、小野小町と深草少将に自分たちを例えるが、どちらの例も男性の一方的な恋を象徴し、女性の本意は他の男性にあったとされている。特に、高尾太夫は権力や富になびかなかったという伝説がある。また、お力は結城の紙入れのお札を撒くが、後の場面で、源七の女房お初はお力が太吉に買い与えた高価なカステラを撒き捨てる。高価なものが撒き捨てられるという行為を重ね合わせて見た時、そこには持ち主の属する社会や持ち主に対する強い反感がこめられていることが伺える。つまり、場面二では、結城はその身分の差ゆえにお力から反感をさえ、もたれている程度の一人の客にすぎないのである。

(二) 場面三―週に二度、三度通う結城とお力の変化の兆し(ある月の夜の菊の井の二階の小座敷)

場面三では、お力は結城と向かい合っている。結城はこの場面でも、お力の素性を知りたがり、いろいろと問いかけるが、お力は応えず、やり過ぎす。「およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。(三)」。源七が来たと店の女が伝えに来る。お力は断るように女に言う。そして、お力の視線は前にいる結城を見ず、伸びあがるように二階から源七の行方を追う。

結城の問いは続くが、お力は「貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ。奥様のおできなされた處を見たり、ぴつたりと御出のとまった處を見たり、・・・」という言葉で結城に返して、やり過ぎす。しかし、こうした甘い言葉とは裏腹に、結城に対するこうしたお力の無関心は言語行為に表現される。お力の内心にある「常には左のみに心も留まらざりし結城の風采(六)」という表現から、この言葉が営業用のお愛想であることは明らかである。そして、お力は問い続ける結城に対して「私が我まま故、申まいと思ふ時は何うしても嫌やでござんす」と言い、結城の問いを断つ。ただし、一葉は、この時お力に「あなたにはこの間から聞いてもらおうと思っていました」と言わせ、お力が結城に対して心を開く気配をみせ始める。

だけれども今夜はいけませぬ、何故く、何故でもいけませぬ、私は我まゝ故、申まい苦しからずば承りたい物だといふに、貴君には聞いて頂かうと此間から思ひました、と思ふ時は何うしても嫌やでござんすとて、ついと立つて椽がはへ出るに(三)

場面の最後で、お力の視線は源七の子、水菓子屋で桃を買う太吉を見つめる。^(注8) お力は、お力に物語らせようとする結城の問いに答えないが、見つめるという行為で自分の心の在り処を示すのである。

四・二 上客となる結城

(一) 場面五 丸木橋から落ちそうになったお力(盆の十六日)

この場面は、前の場面四で源七の女房お初にさげすまれた遊女達を指し、「誰れ白鬼と名をつけし」という表現で始まる。男達を無間地獄に落とすこの女達も「母の乳房にすがりし頃は手打ちあわくの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる物なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に真からの涙をこぼして・・・(五)」という文が続くが、場面二でお力が紙幣には目もくれず名刺を選んだことを思い重ねると、作者のお力を無垢な魂を持った人物として描こうという意図が伺える。続いて、まだ浮いた風でしっかりしない染物屋の辰さんを思い悲しむ女、息子の与太郎に合わせる顔がないと、内職では生計をたてられず、女一人で生きていくために遊女に身を落とした我が身を嘆く女がいる。後者には源七の女房お初の境遇が重なる。そして、作者は自分のために命を落とすものがあっても知らぬ顔をするお力も一人で泣き伏すこともあると語る。

盆の十六日、座敷で「わが恋は細谷川の丸木橋」と歌いかけたお力は、突然座を立ち、闇に姿を消す。本稿では、二章で触れたように、この時のお力の心の動きを、厭世観を感じながらも、「人情にも義理にも反しない志を持つ

た生き方」を望み、しかし今の境遇でそんなことを考えること自体が間違いと、最後に思考を放棄したととらえた。そして、お力は氣を取り直す。しかし、夏の盆の夜のにぎやかな小路を歩いても、お力一人が枯れの荒野を行くように、何もかも遠いものに見え、遠い声が聞こえる。

そんな異常な感覚にとらわれたお力の肩をたたき、「お力どこへ行く」とお力を正気に返したのが結城である。この時から、これまでお力がさほど関心を持たなかった結城は、お力にとって意味のある存在として前景化される。お力はこの晩、まさしく丸木橋から踏み返して落ちそうになったのである。言い換えれば、お力は大切な志である「人情にも義理にも反しない生き方をする」ことから転がり落ちそうになったが、結城が肩をうった瞬間、お力は結城に支えられたのである。お力にとって、結城の存在が変わったことは、続く場面六ではっきりと語られる。

(二) 場面六―心を開くお力 同じく盆の一六日(菊の井の二階の小座敷)

これまで結城の問いに、口を閉ざしていたお力だが、この晩は様子が変わっている。酒をおりながらも、「聞いていただきたい」ことがあると告げる。

また、この時、お力の視線ははじめて結城の容貌をとらえる。結城が「うっとりとして」と表現しているように、お力が結城を好ましい魅力的な男性として見つめたことは疑いがない。そして、これまで結城の容貌にはさほど心にも留まらず、源七の姿を延びあがって追ったお力の眼差しは、好意を持って結城をとらえ始めたのである。

常には左のみに心も留まらざりし結城の風采は今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き處より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短かく刈あげて頸足のくつきりとせしなど今更のやうに眺まれ、何をうっとりして居ると問はれて、貴君のお顔を見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おゝ怕いお方と笑つて居るに、

お力は、あなた以外の男性は私の身体が目当てだが、あなたは別だと言う。お力は続いて、何から話そうかとじれ、自分の心の奥底に秘した七歳の頃の原体験について語る。しかし、紅のハンカチをかみ締め、声を殺して忍び泣くお力に、結城がかけた言葉は「お前は出世を望むな」というものであった。周知のように、この結城の言葉の助詞「な」の解釈をめぐる論議がある。和田芳江（一九七〇）は「禁止の詠嘆」としているが、お力の驚いた様子を「禁止」と考える説もある。しかし、本稿では、結城の「お前は出世を望むな」の「な」について、一般に流布しているように否定や感嘆（和田芳恵 他）ではなく、佐治（一九九一）があげている、終助詞「な」の用法の一つに注目したい。^{（注9）}すなわち、佐治は「な」について「尋ねかける気持ちで使われ、話し手の聞き手に対する問いかけ、同意を求める気持ち、または尋ねかけ、念を押す気持ち（ことによって、相手に同意、共感をうながす気持ち）」を表す機能をあげているが、この文脈には、結城が「おまえは出世を望むのだな」と、お力に問いかけたと解釈した方がふさわしい。結城の言葉をより直接的に表現すると、「おまえは玉の輿にのりたいのだな」という確認表現、さらに間接的表現を用いた言語行為として解釈すると、「申し出」という機能を読みとることも可能であろう。お力は「えっ？」と驚き、「私等が身にて望んだ處が味噌こしが落ち、何の玉の輿までは思ひがけませぬ」と言葉を返している。また、さらに結城は言葉を続ける。「嘘をいふは人に依る。始めから何も見知って居るに、隠すは野暮の沙汰ではないか。思い切つてやれやれ」。この表現も自分の推測を確認し、お力の否定に対して、自分の推測（申し出）を再度示したという方が会話として自然であろう。一葉の未定稿(30)では、結城が「お前は出世をのぞむか」と問い、お力が「私も貴君のお目をするどい方と存じました（未定稿(30)）」と答えさせている。

続いて、お力はこの結城の言葉に応じるように、下駄を隠すという思い切った手段により、「何うでも泊らする。」

と駄々をこね、強引に結城を菊の井に泊めるのである。

それでは、お力の心は結城に傾いていったのだろうか。この場面以前の結城はお力にとって「悲しいと言えば、商売がらを嫌ふかと一口に（五）」言う人間でしかなかった。しかし、場面五で結城は、狂うほどに苦しむお力を肩をたたいて正気に戻し、場面六ではいつもは気につけない結城の風貌をうっとり眺める。そして、いつもは一人で忍び泣き、人には容易に漏らさなかった、心の奥底に秘めた悲しみを結城に語るのである。この時、お力は結城に対して普通の客に対する以上の好意を持ったことは間違いない。

しかし、お力が並々ならぬ思いで語った物語に対し、結城はお力が疎ましく感じる「出世」という言葉を口にし、さらに「嘘をいふは人に依る。始めから何も見知って居るに、隠すは野暮の沙汰ではないか。」と残酷とも言える言葉で切り返し、「思い切ってやれ、やれ」という冗談めいた言葉を投げかける。結城は、お力の貧しい人々に対する深い共感と、悲しみ、やさしさ、人情や義理に切り裂かれるような苦しみを理解することができない世界の人間なのである。お力とは別の世界に住む結城はお力の悲しみをすることはできるが、心から共感することができない。結城が好み、感じとれるのは、やんちゃで美しい、商売向けに創られたお力でしかない。賢いお力はそれを感じとり、商売用のお力に戻る。その決意は、太田路枝（二〇〇二）も指摘しているように、お力に結城との始めての出会いで、彼を強引に引き止めた「何うでも遣りませぬ」とほとんど同じ表現、「何うでも泊らする」という強引な言葉を口にする。前田愛（一九八九）は「結城との深い裂け目が露わになる（前田、ibid.p.218）」と表現しているが、私も、この時お力の心はまさに引き裂かれたのではないかと考える。「人情や義理を知らぬ」人の道に背く生き方に悩むお力の告白に対し、結城は正反対の方向から「思い切ってやれ」というメッセージを送ったのである。そして、お力は丸木橋を渡ろうとした場面と同じように考えることを放棄し、自虐的に事の流れに身を任せたのであろう。花柳界の外にいた一葉は、プロの酌婦というお力の立場から、お力を放ち、お力が自らを刻む、つ

まり自分自身を罰する想いで結城と肉体関係を持ったという筋書きを考えたのではないか。この夜、静かな町に夜行巡査の靴音だけが高く響く。このはりつめた緊張感と不安はお力の心を暗示するように感じられる。では最後に、場面八のお力と源七の死について考えていこう。

五 お力の愛と死―引き裂かれたもの

お力と源七は思い合うものとして描かれながら、物語の中では出会うことはない。そして、最後の場面で対峙する二人は死体となっている。この場面は人々のさりげない噂話で構成され、心中か、無理心中か、あるいは殺人か、さまざまな論議をよんでいるが、確かなことは何も語られない。しかし、これまで読み取ってきたように、お力の心の中では、正反対の想いが湧き上がり、拮抗し、彼女を引き裂いたと考えられる。このお力が心的二重性の問題で苦しんでいたとすると、お力の愛の行方にもこの問題は影を落としたであろうし、周到な一葉ほどの作家であつたら、それを物語の筋立てに反映させたであろう。ここでは、お力の心的二重性という視点から、お力の死を考えてみよう。

五・一 未定稿におけるお力の源七への無関心

お力の願うのは、義理も人情も知る生き方であつたが、現実ではむしろ逆の生き方を強いられる環境にあつた。そのため、お力の心には正反対の矛盾する思いが起き、自己分裂を起こす心的二重性の状態にあつたと考えられる。さらに、源七と結城に対する愛について、お力は深い義理を感じる源七を思いながらも、結城に魅かれる。しかし、その結果、結城の言葉によって、お力の心は、それまで彼女を苦しめたのと同じような心的二重性の状態になり、その心が引き裂かれていったという解釈を本稿では行った。

お力の愛に二つの拮抗した力が働くという筋書きを一葉が模索していたことを、物語の結末を描いた未定稿から

検討してみよう。和田芳江（一九七〇）によると、一葉は未定稿では「朝之助が泊まって、肉体交渉があったのちに朝帰りを見た源七の嫉妬に燃えた眼を描いていて、形だけで呼ばれる妻のようなものにあきたらず酒を飲んで憂さをはらすお力を点出しながら、源七の肉恋に狂った刃につらぬかせている（和田, *ibid.*, p. 412）」。後絹を描いた情景では、一葉は、お力の不安の中で、揺れ動く心を描いている。

男は無言にうなづいて行過るをじつと見送つて何とは知らず心細く、又も一つ罪の数をそへぬ、ああ身ながらも夕べの心のほどが分らぬ、何で結城さんがゑらい人であろう、つい一とほりの男一人、あのこすさうな眼つきをおもふても素性は何であろうか知れたものではなし、つまらぬくだらぬ馬鹿、しい、何という私の心か、これが夢であれば善いがと返らぬ事を数へてかと振りかへれば向う横丁の角に立て此方を一目睨みたる人、それとみるより俄かに恐ろしく成りてはたとと駆こみて腰障子ぴつしやりとしめれば、あはてかへつてどうした事とみな、の聞くも苦るしく、二階に上つて障子のひまよりうかがへば、其人は我家の方を見もかへらず、横丁の姿はかくれてお力はふたたび息出る心地のしたりき。（未定稿 C32）

さらに、お力は結城の妾になるが、酒を飲んで鬱々とした生活を送り、ある夜帰らぬ人となる。「かへらぬは道理、湯やがうしろの岡めきたるが木立ひまなく夜は通ふ人もなきを、いかにして迷ひ入りしか聞くだにも恐ろしき最後のさま、我れと覚悟の自殺にはあるまじ、のどもと深くさし貫かれて死したる、其場に落ちる得物もな（以下散逸）（未定稿 C40）」。

こうした一葉の未定稿と「にぎりえ」完成稿における最後の場面の描き方で一貫している点が二つある。一つめ

は、お力が死に、それに源七が関係していること、二つめは源七への思慕を表現する言葉は見うけられないという点である。そして、未定稿と完成稿の違いは、一つは、お力が結城と肉体関係をもったことを罪と明言し、後悔していること、二つ目は、お力は嫉妬に狂った源七によって殺されるという点、三つ目は、結城がお力を妾にする筋立てである。変更点のうち、最後のお力が結城の妾になる筋立ては完成稿では破棄され、他の二点の解釈については完成稿では沈黙の帳の中に閉ざされてしまった。

しかし、本稿では、第一の結城と一夜をともしたことに対するお力の罪悪感については、未定稿で書かれたように、お力にとって不本意なことであり、お力は誠実な源七を裏切るという新たな罪に苛まれ、自分自身を傷つけたと考えた。場面七の夕暮れ近くに、お力は「何処のか伯父さん」と一緒に高価なカステラを太吉に買え与える。^(注10) カステラを大量に太吉に買い与えたお力の意図は明かされていないが、お力が意図していなかったとしても、お力の心の深層にある贖罪意識がそうさせずにはいられなかったのではないか。お力は太吉を哀れに思い、また源七への裏切りを埋めあわせる意味でカステラを買い与える行為をしたのであろう。しかし、源七はお力の想像した以上の情報をこの行為から読み取ったのである。この出来事は源七を絶望の淵に陥れる。(高田知波 一九九八他参照)

この出来事の意味を、第二の未定稿で試みられた源七がお力に一方的に殺意を抱き、殺すという筋書きと合わせて、考えてみよう。太吉の持ってきたカステラはお初を激怒させ、「何処のか伯父さんと一処」という情報は、源七の鬱積した想いを爆発させる(高田知波 2007、他参照)。源七は「お力のかつての情夫の子どもに菓子を買い与られる」、経済的にも裕福で、寛容な男の存在を知る。しかも、時期は盂蘭盆会である。去年のその頃、源七はお力と揃いの浴衣で閻魔堂に参詣し、得意の絶頂にいたはずである。今もお力を思い、胸を熱くする源七が絶望の淵に落とされたことは想像に難くない。未定稿の嫉妬に狂う源七の筋書きは完成稿でも貫かれているわけである。

お力の心には、不安定な思いが拮抗し、そして愛に揺れ動き、自己を引き裂く苦しみは常に彼女を襲っていただろう。また、物語では、苦しみこそすれ、お力は自分の生きるべき道を模索するが、源七は既に生きる気概をなくしており、お力のことだけしか頭にない。二人がとった死出の旅路を、一葉は町の人々の曖昧なうわさにまかせて語らせる。愛知は△源七ではないお力が先に望んだ心中▽としているのに対し、高田は『諸説みだれて取止めたる事な』い終わり方こそが、語り手の目指すところだったのであり、前景化された無名の四人の声の中身の吟味・解析を通じて事件の△真相▽に迫ろうとする試みは無謀以前に無意味だと言わなければならぬだろう (p.134) と述べている。しかし、一葉はこの噂という言説を、ただ曖昧な結末に終わらせるために使ったのではなく、何かごとかを前景化し、読者に印象づけることを目論んだと考えたい。そこで、ここではあえて噂という言説を分析してみることにする。

五・二 噂という言説から響いてくるもの

一葉は噂で物語を終わらせるという手法をたびたびとっている。噂は「諸説みだれて取止めたる事」ないと一葉は書き、高田の論ずるように、あてにならないものとして事実から読者を遠のけているが、同時にあえてそうした手法をとることで、噂の中の真実を浮かび上がらせている場合もある。例えば、「にぎりえ」では、結末の場面以外にもうわさが語られる。先にあげたお力の品性を語る「お力といふは此家の一枚看板、……(中略)……交際際は存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴へて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう(一)」といううわさは、お力を知る人々のうわさである。うわさという曖昧な言説をとっているにも関わらず、多くの研究者はお力の隠れた真実を語る情報としてこの言説を扱っている(愛知、他)。これらの噂が、真実に近い強さを持って前景化してくるのは、語り手が誰であるとい

うより、むしろ噂に対立項がなく、一点に収束していること、この噂を背景から支える言説が物語の他の箇所にも見出せるためである。さらに、「われから」では、千葉の行方は「永代よりの汽船に乗込みの帰国姿、まさし見たりという物ありし」というどこの誰とも知らない噂で語られるが、真実に近い強い印象を読者に与える。一葉は、「にぎりえ」の結末のとりとめのない噂にも同じような表現効果をこめたのではないだろうか。ここでは、このような表現技法による噂の真偽性の判断を手がかりに、お力と源七の死をめぐる語られる噂という言説を読み解いてみよう。一葉は、真実を語る噂、嘘の噂、真偽の判断のつかない噂をとり合わせるという趣向を用いている。

まず、「何にしる菊の井は大損であらう、かの子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらう」という真実を語る噂がある。また、「何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ」という噂については、お力の内面に入り、お力が義理を知らないことで苦しんでいたことを読者は既に知っている。この噂も否定することができる。

反対に真偽の判断のつかない噂もある。これは対立項を持つ噂と、対立項のない噂に分けられる。まず対立項を持つている噂として、無理心中か、心中かをめぐって、「彼の子もとんだ運のわるい詰らぬ奴に見込んで可愛さうな事をした」に対し、「イヤあれは得心づくだ」「女も逆上てゐた男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座ろ」という噂が語られる。また、二人が話していた場所も対立項を持って語られる。「あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな證人もござります」「湯屋の歸りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど」。湯屋の帰りという状況は未定稿Cと同じである。しかし、この噂で繰り返し語られ、前景化される「二人が話していた」という共通点は未定稿には見られない。未定稿では源七とお力は話し合うというより、源七が一方的にお力を襲っている。そして、立ち話をした、一緒に歩いて話をしたという表現は、二人が烈しく争ったのではなく、何事を静かに話し合っていたという印象を与える。それは、一葉が嫉妬に狂う源七という筋書きを捨て、まさにお力を助け、導く不動明王としての役割を源七に与えたこと

(鈴木他参照) を暗示するようである。

対立項のない噂でも二人の合意による死が暗示される。「切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない」というお力の傷は、無理心中というより、近松門左衛門の心中物と同じ描写の手法を感じさせる。^(注12)「引かへて男は美事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、ゑらさうに見えたといふ」も対立項がない。対立項がない噂は無標であり、それだけ強さを持って、読者の心に伝わってくる。つまり、作者がそう意図したことになる。一葉は対立項をなくすことで、この表現を際立たせ、読者に伝えようと意図したのではないか。その真偽は暗示にとどまり、明らかにされませんが、お力が心的二重性の問題で引き裂かれるように苦しみ、源七は既に生きる氣力をなくし、二人の心を絶望が支配しているであろうことは想像に難くない。こうした物語の背景は、噂が暗示する二人の合意による死の真実を伝えるものになる。

では、さらに一葉はなぜ嫉妬に狂う源七がお力を殺すという筋立てを破棄したのか、言い換えれば、書き改められ、おそらくは二人の合意による死を結末とした「にぎりえ」は、どのような力を持って、読者に迫ってくるのかを考えてみよう。まず、上客の前であるにもかかわらず、座敷からのびあがって源七の姿を追ったお力の源七に対する想いがより自然に描かれることになった。町で桃を買う太吉、浴衣という言葉から、私たちは七月の初めという時期を想像することができる。つまり、揃いの浴衣を着た昨年のお盆のあたりから、この場面のお盆の二週間ほど前まで、お力の心を占めていたのは源七である。一瞬、お力の想いが結城に揺らいだにしろ、源七への強い思いは、義理堅いお力の心に今もなお生きていたとする方が自然であろう。

さらに、ドストエフスキーの『罪と罰』のテーマであった、社会の不条理を訴えるという点も一葉は意識していたはずである。「我れは人の世に痛苦と失望とをなぐさめんために生まれ來つる詩のかミの子なりをくれるものを

おさへなやめるものをすくふべきは我がつとめなり このよほろびざる限りわが詩はひとのいのちとなりぬべきなり 筑摩書房刊「樋口一葉全集 第三巻上 塵之中日記」の補注。草稿の案にあったように、お力が結城の妾となる物語、あるいは嫉妬に狂った源七がお力を殺す筋立てでは、社会を牛耳る強者の側の通念枠組みに物語が絡み取られてしまう。お力が社会的強者である結城に背を向け、同じ社会的弱者の源七と死出の旅に出るという構成になってはじめて、「にぎりえ」は単なる恋愛小説という域を超え、深い悲しみに彩られ、社会の不条理を際立たせる不朽の名作となったと言えるのではないだろうか。

最後に源七の妻、お初について触れたい。「貞女であるものの夫に対する真の愛情の欠如した女」、「その関心が生活上の不安に限られている女」などとする研究者もあるが（滝藤、一九九八、p.199）、私は一葉は単なる一女性を描くという以上の目的、すなわち社会の不条理をより鮮明にするために、お初を描き出したと考えたい。

源七の妻、お初はお力の曖昧さや揺れと対照的に描かれている。お力が上品な大島田を結び、値の張る新薬を結び、色白で美しい女性として描かれているのに対し、お初は貧にやつれ、眉毛はぼうぼうで鉄漿もはげかけ、年より七才も年上に見える。しかし、お力がだらしなく浴衣を着ているが、お初は貧しくはあれ、きちんとした浴衣姿である。お力が浴衣の胸元をはだけ、帯をお太鼓くずしに結んでいるのに対し、お初はおそらくは昔は上物であったと思われる鳴海絞りの、だが洗いざらして、しかも前と後ろを切り替えた浴衣を着、それでも帯をきりと締めている。また、お力が「ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、……思ふたとて何うなる物ぞ、此様な身で此様な業體で、此様な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである。（五）」となげやりな言葉を連ねるのに対し、お初は場面三でも、場面七でも夫の源七に対し、筋の通った、合理的な言葉をなげかけ、お力が太吉に与えたカステラに激怒はするが、源七に離縁を言い渡された時も「遂ひには可愛き子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなし（七）」と、源七の様子を冷静に観

察し、太吉の行く末を計算する。お初の言葉には賢さがあふれ、合理的である。お力と比べ、お初は嘆きはするが、自分の生き方に迷いを持っていない。しかも、お初の身の上を考えると、身寄りのない身から布団屋の女房という、一度は玉の輿にのった女性である。他の登場人物はお初のような人生の浮き沈みを経験していない。

しかし、このように生きる気概と、堅実で合理的な考え方を併せ持つお初でも、一日十五銭の内職が太吉との生活を支えきれぬだろうか。より深い濁江の淵に落ちていくかもしれない。お初の悲劇は、お力の悲劇と別の角度から、社会の不条理を鋭く、冷酷に描き出しているのである。

六 終わりに

「にぎりえ」にはお力が苦悩する姿が物語のそこかしこに見られるが、本稿では、一葉はこうした人間の持つ二重性の問題をお力に投影し、それが彼女自身の精神を引き裂くことになったこと、生きることの苦悩を描いたと解釈してきた。そして、心的二重性はお力の愛にも影響し、義理のある源七と魅力的な結城の双方に引かれ、さらにお力がある決意をこめて語った原体験を結城に軽くないなされたことで、お力の心は引き裂かれたという読み取りをした。言い換えれば、主人公達がそう行爲したというより、一葉がそうした意図を持って物語を構成したと推測した。

ただし、ここでは、分析のためにやむをえず、物語を切り分けるといふ手法をとったが、一葉はこの短い『にぎりえ』という物語にいくつもの仕掛けを組み込んでいると思われる。お力と源七のエピソードが廻り舞台のように交互に現れる手法や、さりげなく挿入される夏と冬という二つの季節の対比は（猪狩友一、二〇〇三、参照）、本稿で行ったお力の心的二重性を暗示しているように思われる。

また、次の物語を暗示するモティーフやエピソードが次々とほの暗く見え隠れしながら現れ、消え、別の物語と

してくつきりとたち現れ、それもやがてはじめの物語に引き戻されるように消えてゆく。ひっそりと挿入された名も知らされぬ遊女の語り、それは太吉を連れたお初の境遇と重なる。お力が夫婦喧嘩の軒先を過ぎると、次の段では源七とお初が激しい諍いをし、そして別れていく。物語は普通過去から未来へというような一方向的な時間の経過を基本として描かれるが、私たちは心の中で、過去と現在、そして未来を越境させ、ものを思う。「にぎりえ」の物語にも、過去と現在が交差する、混沌とした空間が仕組まれており、それはあたかも孟蘭盆会の廻り燈籠を思わせる。こうした物語の方向性を感じさせる語りの手法は、幾重もの薄絹の帳をまとった時空をかきわけて、物語が静かに立ち現れる鷗外の「雁」を思わせるが、こうした物語構成の手法についての記述は別稿に譲りたい。

「注」

(1) 日記「塵之中」明治二十六年七月三十日に「これより諸共に燈籠見にゆく」とある。状況は筑摩書房『樋口一葉全集第三(上)』の補注に詳しい。「玉菊燈籠。舊暦七月一日から十五日まで、享保の頃全盛をうたわれた角町万字屋の名姑玉菊を追善して引手茶屋で盆燈籠を出した。燈籠の繪は一流の繪師が畫いた」(同著、p.310)。

(2) 太田路枝(二〇〇二)もお力の考えるという行為に注目しているが、本稿で扱っている心的二重性については触れていない。

(3) 前田愛(一九八九)はお力の父と祖父への鎮魂歌としてこの言説をとらえる。お力が結城に父と祖父のことを語るのは孟蘭盆会の七月十六日の晩である。

(4) ただし、結城と初めて会った場面で、お力は「天下を望む大伴の黒主とは私が事」という言葉を口にしていく。

(5) 愛知峰子(一九九六)は「お力はこれまで通り生きる道を選んだと考えており、そのかぎりでは、不変説の

理解に立つものである。しかし、そこにあたかも綱渡りのようで、明確な展望は欠きながらも、／＼単なる諦め／＼ではない、敢えてこれまでの生き方を選びとっていく姿勢を読みとることができないのではないかと考えている。下層生活の苦悩にあえぎながらも、それと正面から向かい合おうとする人生選択である。(愛知・ibid., p.79)」と記している。

(6) ここでは高田知波(一九九六) 他が解釈しているように、源七ではない、「彼の人」赤坂以来の馴染「がお力に二枚切手の大封じの手紙をよこし、その手紙に大してお力が「あれもお愛想さ」と言ったと考えたい。

(7) お力の源七を「不動さまの名代」とする言葉について、菅は結城の「俳優で行ったら誰れの処だ」という問いを受けた答えとして「市川団十郎をさすか(菅、ibid., p.246)」としている。しかし、ここでは、役者の比喩ではなく、むしろ不動明王という比喩にこめられた意味を解釈した方が、より深くお力の気持ちを読み解くことができるのではないか。

(8) 「菊の井」という舞台の名、物語の半ばに太吉が水菓子やで桃を買うエピソードが挿入されるなど、一葉は密かに意中の人の名を物語りに記したように思える。

(9) 確認の終助詞「な」と解釈される用例が一葉の作品に見られる。「浮世は罪の世の中よな(花ごもり)」、「大黒さまと言ふのだな(たけくらべ)」。

(10) どこかのおじさんを結城と仮定し、「幸福の余滴」、源七に対する「復縁」のメッセージ、源七にあてた「縁切り状」という解釈がなされているが(高田知波他、参照)、お力が結城と結んだ関係は不安定なものであることから「幸福の余滴」とは考えにくい。また、「復縁」は本稿が考える、お力の源七への思いのあり方に近い。しかし、お力が結城と一夜を過ごしたその行為を後悔したとしても、その翌日早急にカステラを大量に買い、かつての情夫に復縁を表示するという行為は、あまりにも性急ではないだろうか。しかも、一夜

線は説得力が弱い。さらに、人一倍、情や義理を感じるお力が、誠実な源七を冷酷に傷つけるという行為はできないであろう。

また、場面七は七月十六日の翌日、すなわち七月十七日の夕刻とする解釈が多いが、日を特定する記述はない。お初の台詞に「昨日らも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず」とあるが、菅（二〇〇一）の補注によると、『東京年中行事』（明治四十四年）に「盆の七月十五日に送り団子として白い団子を備える」という記述がある。また、源七が思い出しているお力と参拝した閻魔詣は去年の七月十六日のことである。一年前の同じ日のことを思い出す方が筋立てとして自然である。また、七月十六日の夜、お力は夫婦あらしひの軒先を過ぎる。とすると、七月十六日とすることも可能である。ただし、一葉はこのカステラを日の出やのものとしたが、それによって「何処のか伯父さん」は朝之助であること、七月十七日を暗示したのかもしれない。

(11)「曾根崎心中」のお初・徳兵衛の心中場面では、「眼（まなこ）もくらみ、手を震い、弱る心を引き直し、取り直してもなお震い、突くとはすれど、切っ先はあなたへはずれ、こなたへそれ、二・三度きらめく剣の刃、あつとばかりに喉笛に、ぐっと通るが、南無阿弥陀、南無阿弥陀、南無阿弥陀と、割り越し、割り越す腕先も、弱るを見れば、両手を伸べ、断末魔の四苦八苦、あはれと言うもあまりあり」。一葉が近松の浄瑠璃本を目にしていたことは想像に難くない。

「参考文献」

- 愛知峰子（一九九六）『「にぎりえ」にわたる八丸木橋』『論集 樋口一葉』おうふう、Pp.75-97
- 猪狩友一（二〇〇三）『「にぎりえ」』『国文学解釈と鑑賞 特集Ⅱ樋口一葉』至文堂、Pp.114-119

宇佐美毅（一九九八）『小説表現史と一葉』『論集樋口一葉Ⅱ』おうふう、Pp.113-131

太田路枝（二〇〇二）『魂祭りの夜―「にぎりえ」論―』『論集樋口一葉Ⅲ』おうふう、Pp.89-102

金澤美知子（一九九四）『ドストエフスキー―川端香男里・金澤美知子著『ロシア文学』放送大学教育振興会

木村真佐幸（一九六八）『一葉文学における近代的自我の問題―「にぎりえ」「十三夜を中心に―』『札幌大学紀要、

教養部論集1』Pp.191-219.

斎藤久美子（一九九〇）『自我とパーソナリティ理解』『臨床心理学大系2』金子書房、Pp.108-150

榊敦子（一九九六）『行為としての小説―ナラトロジーを超えて』新曜社

菅聡子（二〇〇一）『「にぎりえ」脚注』『樋口一葉集』岩波書店

鈴木啓子（一九九六）『救済の陰画―供犠としての『「にぎりえ」』』『論集 樋口一葉』おうふう、Pp.98-119

関礼子（一九九七）『語る女たちの時代―一葉と明治女性表現』新曜社

高田知波（一九九六）『声というメディア』『論集樋口一葉』おうふう、Pp.120-137

滝藤満義（一九九八）『一葉文学―生成と展開』明治書院

田中優子（二〇〇四）『樋口一葉「いやだ！」と云ふ』集英社

塚田満江（一九六七）『誤解と偏見―樋口一葉の文学』中央公論事業出版

橋口晋作（二〇〇二）『樋口一葉の小説の構成法とその様相』『論集樋口一葉Ⅲ』おうふう、Pp.221-237

平岡敏夫（二〇〇四）『ハタ暮れVの文学史』おうふう

前田愛（一九八九）『樋口一葉の世界』筑摩書房

峯村至津子（一九九八）『一葉小説と同時代環境』『論集樋口一葉Ⅱ』おうふう、Pp.132-150

和田芳江（一九七〇）『「にぎりえ」脚注』『樋口一葉集』角川書店

「参考資料」

樋口一葉「にぎりえ」(一九七〇)『樋口一葉集』日本近代文学大系八、角川書店

樋口一葉「にぎりえ」(二〇〇一)『樋口一葉集』新日本古典文学大系明治編二十四、岩波書店

樋口一葉「にぎりえ」(一九八四)『樋口一葉集山口洋編』和泉書院

樋口一葉「にぎりえ」(未定稿含む)(一九七六)『樋口一葉全集第二卷』筑摩書房

樋口一葉「日記」(一九七六)『樋口一葉全集第三卷(上)』筑摩書房

近松門左衛門「曾根崎心中」(一九九三)『近松浄瑠璃集(上)』新日本古典文学大系九十一、岩波書店